

## 「葦」第39号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院

病院長 榊 寿 右

このたび看護師さんの教育誌である「葦」第39号が発刊されることをお慶び申し上げます。医療レベルは年々高度化、複雑化しており、こうした状況に対応してゆくには、日々の研鑽が必要であることは勿論、より高度化した部分には、それぞれ専門化してゆかねばならないのでしょうか。高度化した医療の現実を実践してゆくには、医師、看護師、放射線技師、臨床検査技師、さらには医療に専属する多くの分野の人たちによるチーム医療の実践が重要だと思います。

しかし絶対忘れてならないものに、“医療者として医療を受ける人たちへの心配りや対応の温かさといった人間性の保持をいかに実行し、次の世代へ継承してゆくか？”があります。医療が高度化し、専門化すれば、人としての温かさが失われてゆきます。また、経済的側面もあるでしょう。本学が独立行政法人化され、県からの僅かな補助以外は、独立採算の中で病院の経営をやってゆかねばならなくなりました。人と人との繋がりや思いやりが十分であるためには、経済的に豊かであり余裕がなければできないことです。しかしこの経済面だけを優先させるようなことになれば、人への思いやりや人間としての温かみは希薄になって、やがて消え去ってゆきます。病院長としても心せねばならないことだと思っています。

教育や研究（特に臨床的研究）についても同様です。教育面、研究面を充実させようとするほどに、“人よりも規則が優先”され、“患者という人間が研究の単なる一対象”でしかなくなってしまいます。教育、研究は大切ですが、それは人への思いやり、人のためにあることを、決して忘れてはならないことです。ひとの命を助けるためには、ひとの病気を治すためには、看護教育も看護研究も、医療とかあるいは医療人という大きな範疇の中での重要部分を占めるが、同時に一部に過ぎないことだと、いつも心していないとだめだと思います。

いま、医療人に最も要求されているもの、それは、医療の知識や医療技術もさることながら、教養であると（わたしは）思っています。わたしが「葦」の巻頭言を依頼されて、ここに書いていますが、いったい何人の人がこれを読んでくれるのでしょうか。いま、最も求められている教養、それは“品格の保持”という言葉に置き換えることができると思います。看護師さんには、“看護師としての品格の保持”が重要なのです。わたしのいま感じていることに対して、皆さん方はどのようにお答えになるのでしょうか。＜今の若い人たちは、情報技術（IT）が普及して、読書の習慣と趣味を失ってしまっている。私が大学の教官になって、学生たちが本を読まなくなったことに初めて気がついて以来、学生や若者の集団をつかまえては、“君たちにとって本当に重要な書物はなんですか？”と尋ねてみることにしている。しかしほとんどの学生、若者は黙ったままだ。質問の意味がわからないのだ。書物を伴侶とするという考え方は、彼らにとっては無縁となってしまう。彼らは書物を伴侶として、そこから品格を学ぶという最も重要な手段を失いつつあるのである。さらに、いまの学生や若人のなかの一部なのかもしれないが、ひとの気持ちを読み取ることができないのには、ぞっとしてしまう。それは彼らが、人間の特徴やそのさまざまな動機を判断するのに、俗流の“品格とは無縁の知識”しか知らないからである。…現代では何とも貧しいことに、真の多様性に代わって、茶色に染めた髪や外見の奇抜さが幅をきかせている。こんな違いは、内面にあるものについて何も教えてはくれない。…彼らには名作と駄作との区別も、洞察とプロパガンダとの区別もできない＞以上が、わたしがいま持っている関心事です。そして、この巻頭言を読んで、本当にその答えを真剣に考えてくれる看護師さんが、何人いてくれるのか、期待するとともに、心から心配しています。